様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　２９　年　　６　月　２１　日現在

機関番号：　３４５１３
研究種目：　研究活動スタート支援
研究期間：　2015～2016
課題番号：　１５Ｈ０６７７５

研究課題名（和文）自閉症児の関係障碍の形成要因検証：身近な他者の“心的状況の読みとり”能力を介して

研究課題名（英文）Analysis on the causes of relationship disturbance with autistic children.
-focusing on the ability of seeing things from the child's point of view.-

研究代表者

榊原　久直（SAKAKIHARA, Hisanao）

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・講師

研究者番号：９０７５６４６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：子どもと養育者の関係性援助に関する研究として，養育者側の“子どもの心的状況を読み取る能力”の測定法の開発を行った。
あいまいな情動表出の刺激，より明確な情動表出の刺激として，生後3か月児と9か月児とその養育者らの自由遊び場面のビデオ観察を行い，快場面，ニュートラル情動場面，ニュートラルだが曖昧さのある情動場面，不快場面の4種の情動表出場面を抽出した。作成したビデオクリップを用いて「内的状態の種類」，「内的状態の強さ」について予備調査を行い，3か月児，9か月児それぞれ5つずつ，計10個からなる子どもの心的状況を読み取る能力の測定検査を作成した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to construct an original video-based measurement of ability of seeing things from the child’s point of view. This is fundamental research for relationship development support between infants and their parents.
Participants were three- or nine-month-old infants and their mothers. Infants and mothers were instructed to free play like at home, and their interaction was recorded. Three-month-old’s video were assumed ambiguous stimulus. Nine-month-old’s video were assumed more definite stimulus. Video clips were classify into 4 affect categories. Positive affect, Negative affect, neutral affect and neutral affect with ambiguity. Then we developed the VTR stimulus by selecting 5 clips from each the age of the moon. The viewpoints of selecting were (1) kinds of affect, (2) strength of affect. In this way, an original video-based measurement of ability of seeing things from the child’s point of view was constructed from 10 clips.

研究分野：　臨床心理学

キーワード：　自閉症　メンタライゼーション　関係発達　関係障碍　関係支援　相互主体性　間主観性　発達障害

１．研究開始当初の背景

日本には約120万人の広汎性発達障碍児者がいるとされ，近年発達障碍への関心は高い。そして様々な障碍特性の説明や対処法が広まり，個人の行動上の理解が進んだ反面，行動の背景にある心の動きが理解されにくい現状がある。

個人に何らかの障碍がある時，その対人関係は負の様相を孕みやすい。負の関係の積み重ねは発達の契機を阻害し，障碍特性の強化や問題行動の表出へと繋がる。すなわち障碍児者の行動特徴の全てが生得的な障碍によるものではなく，付加的に膨らんでいく障碍を抱えながら，他者と生きる中で生じた心の動きの表れとして理解する視点が必要である（小林・鯨岡，2005）。

近年子どもの援助において，子ども個人のみを対象とするのではなく，養育者や保育士，施設職員などの“身近な他者”を巻き込み，関係性全体の変容を促すことに国際的な注目が集まっているが，子どもや身近な他者のそれぞれの特性が，他方に与える影響の検討が不十分である。

２．研究の目的

親子関係に影響を与える要因として，“子どもの心的状況を読みとる(see things from the child's point of view)関わり手の能力”が子どもの安定したアタッチメント関係，ひいては心の理論の獲得に寄与する社会性の発達や認知発達を促すとされ，種々の精神疾患の予防因子としての注目されるものである（篠原，2014）。加えて，心的状況の読み取りは，子ども・養育者側の双方からの関わり合いを促進する，親子関係の好循環を生み出す心理機能の一つであると考えられるものであるとも考えられている。

しかし他者の心的状態の読み取りに関する種々の概念の測定方法は，これまで特定場面の観察やインタビューなど非常に労力を要するものであり，そのことが臨床場面での使用や研究の普及を難しくしていた。そこで本研究では，「子どもに意志や感情があると思う能力(MindMindedness:MM)」の簡易測定法を開発した篠原(2006)の研究を参考に，心的状況の読み取り能力に関する簡易測定法の作成を目的とした。

３．研究の方法

(１)簡易測定法作成研究

①測定用刺激(映像データ)の収集

比較的感情表出が未分化で感情の読み取りが困難であるとされる生後3か月の子どもと，感情表出が分化し他者との非言語的なコミュニケーションの成長が見られだす生後 9か月の子どもらとその母親を対象とした。

収集期間は2016年3月から12月であった。対象者らに対し，日常でのやりとり遊び場面や，子どもの一人遊び場面のビデオ撮影を依頼し,約30分間のビデオデータを収集した。映像は，30分間の連続撮影ではなく，様々な場面からなるものを可とした。

収集協力者の中から，子どもの発達上の偏り（早熟，未熟児など）の可能性が高い家族を除き，最終的に6組を対象者とした。

②測定用基本刺激の選定

得られた映像資料から複数の乳児においてみられた行動のエピソードを選出し，子どもの内的状態の存在を想定するという実験課題が著しく不自然になることを避けて，ある程度解釈可能な乳児の行動場面を複数個抽出した。

加えて，快場面，ニュートラル情動場面，ニュートラルだが曖昧さのある情動場面，不快場面の大きく分けて4種の情動表出場面を選定し,1つあたり 15 秒間のビデオクリップを，計 64 個を作成した。

③測定用刺激の選定のための予備調査

作成したビデオクリップの中から，心的状況の読み取り課題に適した映像を選定するため，関西地方の人文科学系学部にて心理学を学ぶ女子大学生 31 名を対象に予備調査を行った。調査機関は2017年1月であった。

作成したビデオクリップを用いて以下のような教示文によって，「内的状態の種類」と「内的状態の強さ」の2観点からの評定を求めた。

『今からお見せする映像に出てくる赤ちゃんの行動の背景には，①どのような内的状態（感情や意図などのこころの動き）が存在すると思いましたか。「快～不快」の中で最も近いものに○をつけて下さい。②どの程度明確に内的状態（感情や意図などのこころの動き）はが存在すると思いましたか。「非常に強く感じた～全く感じなかった」の中で最も近いものに○をつけて下さい。』

内的状態の種類は「不快（１）～ニュートラル（４）～快（７）」，内的状態の強さは「全く感じなかった（１）～非常に強く感じた（７）」の，それぞれ7件法の評定であった。

④測定用刺激の選定

ビデオクリップを使用した MindMindedness の簡易測定法を考案した篠原(2006)の研究，子どもの心的状態の読み取りの測定を行うための VTR 刺激を選定した島・小原・小林・上嶋（2009）の研究を参考に，上記の2種の評定より本調査で用いるビデオクリップを選定した。

まず，内的状態の種類の観点からは，評定平均値 1.00-1.99 までのものかつ標準偏差 1.00 未満のものを「不快情動場面」，評定平均値 3.50-4.49 までのものかつ標準偏差 1.50 未満のものを「ニュートラルな情動場面」，評定平均値 3.50-4.49 までのものかつ標準偏差 1.01-1.50 未満のものを「ニュートラルだが曖昧さのある情動場面」，評定平均値 6.01-7.00 までのもの標準偏差 1.00 未満のも

のを「快情動場面」として選定した。
　加えて，内的状態の強さの観点からは，評定平均値が 3.00 以上もの，かつ標準偏差が 2.00 未満であるものという条件で選定されたビデオクリップを更に選定した。
　これら全ての条件に該当するビデオクリップの中から，同一の乳児のビデオクリップができる限り少なくなるよう配慮し，最終的に，生後 3 か月児とその養育者，生後 9 か月児とその養育者それぞれについて，「快情動場面」1 種，「ニュートラルな情動場面」1 種，「ニュートラルだが曖昧さのある情動場面」2 種，「不快情動場面」1 種からなる，計 10 種のビデオクリップを最終的に選定した。
　これにより，あいまい刺激とより明確刺激より内的状態の強さとその種類を測定する，子どもの心的状況を読み取る能力の測定検査とした。

(２)簡易測定法とメンタライゼーションや認知バイアスの影響に関する研究
①対象と調査期間
　関西地方の人文科学系学部にて心理学を学ぶ女子大学生 102 名を対象にビデオクリップを用いた評定課題とアンケート調査を実施した。調査期間は 2017 年 1 月から 4 月であった。調査はすべて集団法にて実施した。
　記入漏れの回答を全て除き，また乳児の情動を読み取る課題であることを考慮し，子育て経験者を含む社会人学生を除き，分析には 87 名のデータを用いた。分析対象となった協力者の年齢は 19 歳から 23 歳で，平均は 20.30，標準偏差は 0.91 であった。
②調査ツール
　調査には以下の２つを用いた。
“子どもの心的状況を読みとる関わり手の能力”簡易測定法（申請者が予備調査より作成たもの）：上記のビデオクリップ 10 種をスクリーンに映し出し，スピーカーで音声を流しながら映像の視聴を求めた。約 15 秒からなる映像を 1 種見るたびに映像を止め，『映像に出てきた赤ちゃんの行動の背景には，①どのような内的状態（感情や意図などのこころの動き）が存在すると思いましたか。「快～不快」の中で最も近いものに○をつけて下さい。②どの程度明確に内的状態（感情や意図などのこころの動き）はが存在すると思いましたか。「非常に強く感じた～全く感じなかった」の中で最も近いものに○をつけて下さい。』と，それぞれ 2 つの回答を求めた。　内的状態の種類は「不快（１）～ニュートラル（４）～快（７）」，内的状態の強さは「全く感じなかった（１）～非常に強く感じた（７）」の，それぞれ 7 件法の評定であった。
　メンタライゼーション能力尺度（山口，2011）：本尺度は「人の行動の背景にある意図的なこころの状態について，想像的な能力を使って認識してその行動を起こしている人に対処し，他者を自分の中から理解することや，逆に自分について他者の目から見て理解すること（メンタライゼーション：Batemn& Fonagy，訳書 2008）」を測定するものである。本尺度は，対自的メンタライゼーション 12 項目，対他的メンタライゼーション 11 項目からなり，「全くあてはまらない（１）～非常によくあてはまる（４）」の 4 件法の評定であった。

４．研究成果
(１)尺度の因子分析と信頼性分析
　メンタライゼーション能力尺度の 23 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化から 2 因子構造が妥当であると考えられ，再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果，2 つの因子に高い因子負荷量を示した 3 項目を分析から除外した。第 1 因子は先行研究と同じく 12 項目からなる「対自的メンタライゼーション（以下：対自）」，第 2 因子は先行研究から 1 項目削減した 8 項目からなる「対他的メンタライゼーション（以下：対他）」と命名した。信頼性分析の結果，それぞれの因子は α ＝.80, α＝.87 と十分な値が得られた。またそれぞれの因子間相関は.24 であった。

(２)“ 子どもの心的状況を読みとる関わり手の能力 ” 測定ビデオクリップへの読み取りとメンタライゼーション能力との関連性の分析
　メンタライゼーション能力尺度の「対自」得点と「対他」得点を用いて，グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行い，３つのクラスタを得た。第１クラスタは 80 名，第 2 クラスタは 4 名，第 3 クラスタは 3 名であった。クラスタ間の人数比に大きな偏りが見られたため，現時点では十分な見当ができず，今後，第 2，第 3 クラスタのデータの蓄積が必要であるが，現時点でのデータから探索的な検討を続けた。
　Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ，第１クラスタは対自・対他共に中程度の高さを示す群（両中群），第 2 クラスタは対自には低いが対他は中程度の高さを示す群（他者志向群），第 3 クラスタは対自・対他共に低い値を示す群（両低群）であった。
　各群の評定の傾向をみると，あいまい情動刺激に対する，情有働の強さの評定では，両中群＝他者志向群＞両低群となり，より明確な情動刺激に対しては，両中群＜両低群＜他者志向群となっていた。細かく見ると，両低群はあいまい情動刺激においては，不快情動・情動の双方に対して低い評定点をつけていた。より明確な情動刺激においては，両低群が不快情動をより強く評定づけた一方で，ニュートラルな情動場面（あいまい場面も含む）においては，他者志向群が他の群と比べ絵より強く情動の存在を認める傾向が見られた。
　また情動の種類の評定を見ると，あいまい情動刺激に対しては，両中群＝他者志向群＞

両低群と，両低群が全体的にネガティブな情動だと評定する傾向が見られた。より明確な情動刺激に対しては，両中群＞両低群＞他者志向群と，他者志向群が最もネガティブな情動だと評定する傾向が見られた。

このように対自・対他のメンタライゼーション能力の双方の低さ，もしくはそのアンバランスさは，子どもの情動をより否定的にとらえる傾向や，情動刺激の強さの評価に影響を与えることが示唆された。この知見は，虐待の世代間連鎖や産後鬱など，子育てにおける養育者側の負因がもたらす影響に関するこれまでの先行研究と一致するものであるといえる。

今後は，両低群，他者志向群のデータを蓄積し，より詳細な分析を行うことで，全体的な傾向に加え，あいまい刺激・より明確な刺激への反応傾向の比較や，情動場面の種類毎の評定の比較を行っていくことが必要である。

(３)“子どもの心的状況を読みとる関わり手の能力”への認知バイアスの影響の検討

また，現在は（２）のデータを対照群としつつ，同ビデオクリップに「映像に登場する子どもには障碍がある」という情報を事前に与えてから同様の評定を行うという実験群を設け，両軍の評定値の差を検討する調査を計画中である。

それによって，近年の“発達障害ブーム”以降の，障碍の名称や，障碍に関する知識の普及がもたらす影響について，特に障碍のあるとされる子どものへ心的状態の読み取りにおける養育者側の認知バイアスの影響を検討することができると考えられる。その知見は，障碍のある子どもを“障碍児”として捉えることの負の側面を検証するという，当事者や関係者支援における重要なものとなることが予想される。

＜引用文献＞

①Batemn,A.& Fonagy,P.(2004). メンタライゼーションと境界パーソナリティ障害――MBT が拓く精神分析的精神療法の新たな展開. 狩野力八郎・白波瀬丈一郎（監訳）. 岩崎学術出版社， 2008.

②小林隆児・鯨岡峻（2005）自閉症の関係発達臨床. 日本評論社.

③島義弘・小原倫子・小林邦江・上嶋菜摘（2009）乳児の心的状態の読み取りに関する研究――VTR 刺激の開発と妥当性の検証. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要.56. p83-89.

④篠原郁子(2006)乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発――母子相互作用との関連を含めて. 心理学研究.77(3).p244-252.

⑤篠原郁子（2014）心を紡ぐ心―親による乳児の心の想像と心を理解する子どもの発達. ナカニシヤ出版.

⑥山口正寛（2011）メンタライゼーションの測定に関する予備的研究(1)メンタライゼーション尺度作成の試み.日本発達心理学会大会論文集.22.p417.

５．主な発表論文等
（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①榊原久直（2017）“華麗なる誤解”を求めて―自閉症臨床・保育実践とメンタライゼーションの心理臨床との交差点から―. 神戸松蔭女子学院大学. 神戸松蔭こころのケア・センター. 臨床心理学研究. 第 12 号. p25～30. 査読無し.

②榊原久直（2017）子どもの発達を支えるための視点“プライム PRIME”～感覚運動あそびの活動を通して～. 神戸市総合児童センター. 研究紀要. 育ちゆくこども―療育指導事業(発達クリニック)の実践と研究―. 第 9 号. p103～112. 査読無し.

③榊原久直（2016）セラプレイ的遊びを介した親-乳幼児心理療法の試み―母親のメンタライゼーションの変化に焦点を当てて―. 神戸松蔭女子学院大学.神戸松蔭こころのケア・センター. 臨床心理学研究. 第 11 号. p12～21. 査読無し.

④足立匡基・榊原久直（2016）障害者施設支援員の支援困難場面に対する認知的評価と職業性ストレス反応との関連. 日本特殊教育学会. 特殊教育学研究. 第 53 巻 5 号. p313～322. 査読有り.

⑤榊原久直（2015）見失った子どもの心に触れる母親との面接課程～自閉症者を抱える養育者との親面接から考える Mentalization～. 大阪大学大学院人間科学研究科.心理教育相談室紀要.第 21 号. p3～10. 査読無し.

〔学会発表〕（計３件）

①榊原久直（2017）関係発達・関係障碍の変容をどのように捉えるか－前言語期の ASD 児を抱える養育者との SEIQoL-DW の変法を用いたインタビューを基に－. 日本発達心理学会第 28 回大会. 広島国際会議場. ポスター発表. 2017 年 3 月 25 日.

②榊原久直・高井美和（2016）児童養護施設における関係援助による施設職員の心的変化-セラプレイによる介入と SEIQoL-DW の変法を用いたインタビューを基に-. 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会. パシフィコ横浜. ポスター発表. 2016 年 9 月 5 日.

③榊原久直・酒井佐枝子（2016）アタッチメント理論に基づく子育て支援-「安心感の輪」子育てプログラムを用いた実践を通して-. 日本発達心理学会第 27 回大会.北海道大学. 自主シンポジウム（企画・司会・話題提供）.2016 年 4 月 29 日.

〔図書〕（計１件）

①榊原久直・他９人（著）神戸松蔭女子学院大学人間科学部心理学（編）（2016）暮らしの中のカウンセリング入門・心の問題を理解するための最初歩. 北大路書房. 総 251 頁．担当頁 84-93，116-125.

６．研究組織

(1)研究代表者

榊原　久直（SAKAKIHARA,Hisanao）

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・講師

研究者番号：90756462